

サーキット・ライダー 2003年 9月号

わたしのもとに来なさい

疲れた者、重荷を負う者は、だれでも私のもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの頸(くびき)を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの頸は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。

マタイ 11:28-30.

5月中旬に大学院の前年度が終了しても期末の論文が終わらず、6月中旬まで1ヶ月も教授から延長を頂きやっとの思いでその論文を仕上げた身には「働きながら学ぶことの大変さ」と同時に「学べる喜び」、そして「多くの方から助けていただいているという事実」が身に染み、この夏は実に「休み」のありがたさを実感しました。英語礼拝、日本語礼拝を2週に渡りお休みしましたが、留守の間、英語、日本語礼拝で合計4人の方に礼拝説教、証しをお願いしました。この場をお借りして日本語礼拝で説教を取り次いで下さいました浅田容子牧師と荒美俊三兄に心より感謝いたします。

休みの間、特にどこか遠くに旅行したわけではありませんが、2週間以上お休みを頂き、アメリカでの母教会、ニューヨーク日米合同教会の礼拝に出席したり、ロングアイランドでゆっくり過ごしたりして教会や自分の道についてこれまでの事、現状、そしてこれからについてゆっくりと考えることができました。そして、当たり前のことですが、「やはり人間、忙しさに追われていては駄目だ」とつくづく思いました。夏休みがこれほどありがたいと思ったのは初めてかもしれません。「夏休みなど贅沢、生きる為に働かなくてはならない。」と言われる方もいらっしゃると思いますが、毎日生きるだけに追われていると、人間どうも想像力も創作意欲も失ってしまうようです。貧しいから働き詰めで当然というのも人間性を欠いた近代資本主義搾取の原理に蝕まれているような気がします。例えば私達の先人達を見てもそれが解ります。

江戸時代も半ば頃になりますと、裏長屋に住んでいた貧しい町人達でさえ、借金をしても暑い夏は休んだようです。借金は涼しくなったら働いて返せばよい。それが「江戸の粹」だったようです。江戸時代は正に町人文化が花開いた時代ですが、浮世絵、歌舞伎、川柳、食文化、舟遊び、花火、祭りなど、働き詰めで遊び心を失った人々からは到底出てきません。江戸の町人文化は貧しいなりに休みを取り、仕事以外の事を楽しみ、自分達の文化を育てた結果と言えます。江戸の町人に倣ったわけでもありませんが「充分休みリフレッシュされ新たに仕事に勉強に教会に臨む。」これが今の私の状態です。

教会のカレンダーは本来、12月の待降節から始まりますが、実際には9月から始まる学校のサイクル(アメリカの学校は9月始まりで大学は5月、小中高は6月で終わる)に合わせています。ですから9月は日本の4月と同じく新たなスタートです。今年度は何をすべきか?既に数人の教会員が「もっと教会を宣伝しましょう!」と言って下さり、Jr.教会(教会学校)も「プログラムを充実させていき、子供達を増やしましょう!」と活動を始めました。私は人数で教会の良し悪しを決めたり、人数が増えることが教会成長だと単純に考えませんが、「より多くの人たちに福音を伝える」「イエスの愛を広める」ということの大切さは実感しています。

また教会が霊的な場であるということは魂の憩いの場であると思っています。夏休みのように長期休暇ではありませんが、日々の生活に疲れを覚えている人達、友人関係、会社、隣近所、親子、夫婦など様々な人間関係に疲れている人達、或いは生きることそのものに疲れを覚えている人達が、御言葉を聞き休める場であればと願っています。ここで魂の安らぎを得て家に帰り、また新たな1週間を過ごす。そのような場に教会がなればと常々願い祈っています。

イエスは言いました「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」と。肉体的な疲れに休養と滋養が必要なように、精神的疲れ、霊的渇きには神の御言葉=命の言葉が必要です。私達の教会はそのような魂の安らぎの場でありたいし、あるべきと思っています。皆さんはいかがでしょう?十分な休息を体と心の為に取りられているのでしょうか?もし忙しくて或いは思い悩んでいて、自分のこと、周りの人々、自然などを振り返る余裕も無かったら赤信号です。イエスの頸(神の言葉、戒め)を共に負いませんか。

吉松 純